



統一



第 二 六 六 號

宇宙第一の寶典に就て

僧 正 野口日主

御消息文と日蓮上人の人格

文學士 國友日斌

佛子の自覺 僧 正 今成乾隨

立正安國論綱要

本多日生

兒童教育と宗教心 權僧正 井村日咸

淺草公園と現代人要求の人物 三上義徹

光風錄 布教師 笹川眞應

●各地教報

弘 告

四月一日午前十時二十五分
 村雲尼公様大森御着車
 御宿院池上本門寺へ

四月三日午後一時於池上本門寺大客廳
村雲婦人會臨時總會
 四月五日午後一時より
 村雲婦人會御親教
 四月二日より六日まで五日間
 池上本門寺開堂供養

四月七日午前九時五十分大森御發車橫濱へ
 四月七日、八日、九日、於佐藤別莊及橫濱常清寺
 橫濱支部總會及御親教

四月十日午前十時二十分橫濱御發車、東神奈川
 を經て甲府へ

四月十一、十二日於若尾庭園及甲府遠光寺
 甲府支部總會及御親教

四月十三日甲府御出發
 身延山御參拜 (御一泊)

四月十四日、岩淵を經て靜岡驛より御歸院

三月 **村雲婦人會**
 (電話番町 二二七二)

日蓮宗聖典

日蓮宗管長 旭日苗師序 柴田一能師編
 顯本法華宗管長 本多日生師序 山田一英師編

製本五寸一分橫三寸六分
 紙上等紙全支
 一冊一千二百頁

種上製本黒色紅色緑青朱文
 種上製本黒色紅色緑青朱文
 種上製本黒色紅色緑青朱文

並特價金一圓七十五錢
 並特價金一圓五十五錢
 並特價金一圓四十五錢

貳千部限 極上特製一圓四十錢 特製一圓二十錢
 り 特價並 製九 十 錢郵稅各清國朝鮮臺灣

本書内容は經典部祖書部に分ち如來攝化の總要
 を明にし人生の歸趣を指導せる唯一の要典にし
 て國民必讀の聖典也其裝幀の高雅なる携行に使
 なる價額の低廉なる本宗出版界のレコード破り
 也本書は信する人と未だ信する能はざるの人と
 を問はず敢て本書を一讀すべきを薦む。

無我山房

東京巢鴨町二ノ三五
 振替東京三二二二番

發行所

▲開堂記念大會

大日本帝國に於ける統一開顯主義宣傳の大會堂竣工を告ぐ、名けて統一閣と云ふ

吾人は『我弟子等心みに法華經の如く身命もおしませず修行して此度佛法を心みよ』との凜乎たる聖訓を體し、上人畢生の主張たる立正安國の大義を持して、王佛冥合の理想實現を期せむ、茲に四月二十八日立教開宗の聖日をトシ開堂記念大會を擧ぐ

△二十七日(午後一時より)講演を開き全國の布教師二十餘名出演

△二十八日(午後一時)日蓮主義大講演會を開く講師は海軍大佐佐藤鐵太郎君

大審院檢事矢野茂君、子爵法學士五島盛光君、文學博士姉崎正治君

餘興：三曲合奏。講談。

△二十九日(午後一時)通俗教育演藝會を開く(娛樂と調音)

筑前琵琶。謠曲。琴。趣味講演。洋樂。

當日内務省民情調査員の講演あり

東京淺草北清島町 統一閣

立正安國論綱要

本 多 日 生

前回既に少しく述ぶる處あり、些か重複する邊もあれど、本日(三月廿三日)は、(一)安國論選述の動機、(二)一章の主眼、(三)安國論全文の大意、…の三箇條に經て講述しやう。

第一 立正安國論選述の動機

安國論の奥書に依ると、正嘉正元の頃よりも、每歲天變あり地天あり、災厄踵を接して慘狀言語に絶す、これ抑も何の故ぞ、この原因に遡つて考へ給ふべく、大聖人は、岩本實相寺の寶藏に入つて、靜に、大藏經を閲覽致しますこと前後四箇年、聖の感應する所、即ち立正安國論の大論作となつたのである。換言すれば當時天下の非常なる形勢が、安國論選述の近因である。然し乍ら、更に深く遠く拜察すれば、大聖人の永き間の御研鑽が、この根底をなしたものと云ふべきである、

當時佛敎界に跋扈せる宗教々義の解釋法や佛敎家の陋劣なる心事や、さてはまた、社會國家の表に立てる政治家の思想や、凡て皆な厭ふべく嫌ふべきものなりとの、聖斷の誤らざる所以を、一層確實にすべく、岩本に御入藏あらせられたものと觀るべきである。

北條時頼に安國論を提出せるは、御歳卅八才の時であるが、安國論の精神、即ち、國と法との關係及び人道と信仰との關係に於て、この理想の一致融合を示さむと欲するの精神は、大聖人の根本信として既に久しく抱懷せられたる處、而して、大聖人の全生涯を通じて節持し光顯せられたる處である、必ずしも安國論一篇に限らず、御遺文全篇悉く、この根本精神の發現ならざるはない。

立正安國論は、立正安國の大義の一部分を書き示されたるものにして、この全面を盡くしては居らぬ、『一昨日御書』には、再び立正安國論を添えて諫曉せられ、(時正に聖壽五十歳)直ちに、佐島御流罪の大法難となつたのである、北海風雪荒き中に筆を採り給へるもの

(1)

に『開目鈔』あり、『觀心本尊鈔』あり、而して此れ等の御書は皆な立正安國の大義を旨を示されてある、御遺文集中最後に載せられたる『治病鈔』にも此御精神は明かに拜せらるる、同鈔に曰く

「此三十餘年の三災七難等は一向に佗事を難す。日本一同に日蓮をあたみて、國郡郡郷村、人ごとに、上一人より下萬民にいたるまで、前代未聞の大瞋恚を起せり。見思未斷の凡夫の元品の無明を起す事此と始なり。神と佛と法華經にいのり奉るは、いよ増長すべし。但、法華經の本門をば法華經の行者につけて除奉る。結句は勝負を決せざらん外は此災難止難るべし」(縮遺二千百二頁)

こゝに「勝負を決す」とは、大徳教の建設である、區々なる枝葉の議論に囚はれされ、堂々正々、一國の大精神を確立せよと、これ實に 大聖人の御宣言である。(因に『治病鈔』の後に「波木井御書」あれども、こは後人の偽作なりと傳へらる、最後の御書に御馬のことを認められたる(波木井殿御報)は、單なる御書節のみ)聖人の人道の上に大啓發をなし凡て之を活かし來つたのにも拘らず、淨土門徒は、この人道を捨て、彌陀一佛に絶待歸命して了つた、人を迷はすの教である云々と意である。

同御書の中に、更に、
「佛、世に出給て、此五戒を持って人身を受て其上に佛法を聞て悟、を聞くと説給へり。然れば此五戒に様様の功德を備へて戒として攝せずと云ことなしと説給。此五戒を根本として大乘の諸戒を具足するなり。故に此五戒をば具足根本業清淨戒と名るなり」

(縮遺廿五頁)

と宣ふ、是れ五戒を超越したる絶待の大乗戒を主張するの魔想邪見を破したる金言である、この精神が進めば、即ち立正安國論となる。これ、本論の元意である。安國論の表面は、極めて神秘的である。道徳の問題等は、これ無きが如くなれども、實には然らず、人倫道徳の破壊の咎と、宗教信仰の無視の罪と、並び破するものが、立正安國論である。

滅のときに、安國論を御上足に授け給へることや、池上開堂供養のときに、安國論を御講述遊ばされたることや、何れも甚深の聖意を推知するに難くはない。

「戒體即身成佛義」は、十八才の御時の撰びであるが、これ亦た、現實の世界わけて人間を中心とせる佛教を開顯せんとするの御精神を發表せるもの、次の御書、即ち廿才の時御認め「戒法門」の中には、已に道徳と宗教との關係を明かに示された、大聖人曰く

「上の五戒は、名目は提謂經に出たりといへども、意は止觀眞言の道理を以て書るなり、善導の釋にも仁義禮智信、地水火風空の名計は擧たりといへども、其義理なし。又淨土宗の學者も知ことあたはず、是體に知ぬと云とも淨土に生れなんや。わづかの小善成佛と申は是體に候なり。淨土宗の學者傳教大師の釋を引ども。末法には持戒の者なしと云釋の意を知らずして人人を迷はす法門なり。恐るべし、恐るべし、(縮遺廿三頁)

謂ふ所の五戒とは、人道のことである、傳教大師はこゝに、立正の正の中には、人倫と信仰との二方面が包含せられてある。

正 人倫

この考は、安國論の初めの部分に明かである。法師は詭曲にして人倫に迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨する無し」等の嚴誡、正しくこれを證すべし。安國論は、人道と國民道徳と宗教的信仰とを一巻に收め來つて餘蘊なきもの、その結末の御文には

「早改三信仰之寸心速歸實乘之一善」云云

とあり、信仰の寸心とは何ぞや、曰く、小なる理想に囚はれて、更に大理想に奮ふべきを忘れたるの心である。理想は尊重すべきものであるが、凡小の理想に踏踏して向上無きは斷じて許すべきでない、之れを改めねばならぬ、即ち、分裂的な信仰や、不統一な道徳心を捨てよとの、聖意である。次に實乘之一善とは何ぞや、曰く、一乘の大善である、人道と宗教と、刹那と久遠と、現實と理想と、凡て此等のものを一に看るの

(4) 思想である。言ひ換ふれば、眞諦と俗諦とを統一せるものが實乘之一善である。

この實乘を尤もよく説明せるものは「開目鈔」である。儒外内三道を貫串して、一個の大理想を確立し、これに三道を歸着せしめられた、而して、この中心大理想を日本の現實に翻し來つて、「日本の柱とならむ」といふ大誓願を立て給ふは、開けば即ち天地の光明たり、閉づれば即ち日本の柱礎たり、嗚呼、偉なる哉。

第二 立正安國論の主眼

三方面より之を見る。

(天) 統一主義

日本の神々を排くる一向専念の念佛思想は、宗教學上に謂ふ所の、單一神教の思想である。源氏や平家が各その家門の氏神を擇ぶと同然、彌陀の四十八願が直接己れに關係ありとして、多くの佛の中から、この彌陀一佛を擇び出して信するまでのことであつて、多神多佛の統一ていふ根本觀念は無いのである。吾人の理想は

大聖人にあつては、宗教發展の背景には、國家消長の問題が横つて居るのである、これ他の宗教家と全く異なる處である。

國家の理想を深く察し、國家の天職を遠く考へ、内に大義名分を明かにすると共に、外に億兆一心の一心以て、念佛を捨て、禪定を斥け、人道と信仰とを結合せる一念を確立し國家に須らくこの大精神を以て進むべしとせられたる、これ 大聖人の本願である。されば「本尊鈔」には

「一閻浮提第一本尊可立此國云々（縮遺九百四十八頁）」

と宣言せられ、又「三大秘法鈔」には

「戒壇者王法冥佛法佛法合王法王臣一同に本門三大秘密の法を持て、有徳王覺徳比丘の其乃往を移し未法濁惡未來一時、救宣並御教書を申下て尋て似靈山淨土最勝地可建立立戒壇者歟、可待時耳」（縮遺二千五百三頁）」

(5) と豫言し給ふもの、皆、この大精神に深き根柢を据え

統一主義に存する。従てその發現の場合には、人道の上にも、國家の上にも、常に自から光とならねばならぬ。

この統一の大理想より顯はれ来るものに二方面がある。一は道徳と接觸する場合、一は國家と交渉する場合即ちこれである。今、安國論の主眼たる三方面としては、統一主義の確立ていふことの外に、この二方面の問題を數ふるのである、次下に之を述べやう。

(地) 宗教對國家、宗教對道徳、

現實の道徳は、その究竟目的たる理想ありて貴く、現在の國家は永久存立の理想立つて重し。

國家の武力經濟力は、たゞ、この理想の擁護に資するに於て眞の價值がある、日本に於ては、形の上には御皇室、精神の上には、建國の大精神が、國家的理想である。

大聖人の當時には蒙古來寇あり、この事變の前より大聖人は他國侵逼難を豫言せられた、その御心は、國家の存亡を以つて大事件とせられたのである、實に、

て居るのである。安國論の骨子とする處、またこの根本思想に外ならぬ。

之を現代に見るに、列國對峙の狀態は、一日と雖も國防の設備と國運發展の用意とを忽にすることを許さない、茫乎して居れば、國將に亡びんとするの危殆に頻するであらう、國家のこと、大聖人にあらずとも一刻片時も忘るることは出来ないものである。然るに、宗教の現狀は奈何かといふに、多くは信仰の寸心に踴躍して、更に大なる理想に向上せず、國運と相伴はざる實に憐して又慨せざるを得ない。

眼を轉じて教育界を観るに、弊害は同様である、先づ、極端なる現實主義に捉はれたる結果、利己的精神のみ發達し、理想を忘れて、徒らに黃白を愛するに至る、次に、裏面に潜める魔想としては、教育ある人々の中に在る邪見である、人生社會の問題を深く考ふる場合に於て、適當なる判斷なき爲に註政し、或もの如きは、獨斷によつて、自己は絶待超越なりと主張するものがある、而して彼等は個人を尊重するの餘りに、

道德、宗教、國家などを全然脱却せんと欲する。その最も極端なるものに至つては、法律の全部を否定し、社會の全面を咒ふ處の所謂政府共產主義の如きものとなる。されども、その根本觀念は、彼等極端者流のみならず世間通途の宗教家や思想家の中にも宿つてゐる、而も、國家は之を嚴重に取締るの力を實にし得ない、嘆かばしいことではないか。

勿論、かゝる極端な思想を有するものは、兎も角も眞面目に思索をなすのであつて、實際は尊き人物である、たゞ、之を開發し善導せむことを要する。國家は、たゞ單に、國民道德や歴史や傳説やを以て、其の權威の唯一の擔保とすることは、未だ徹底せざるものといふべく、淺見寡聞笑ふべきである。少くも、極端なる思想家の要求を理解し、その際出せる理想的方面を善導して、彼等を一轉せしめて、國家の柱礎たらしむべきである。

安國論は、如上の精神を諷してゐる、曰く、
「國土亂時先鬼神亂鬼神亂故萬民亂」(論遺三百九

左の如し

- (1) 災難の由來を明す
- (2) 災難の經證を擧ぐ
- (3) 佛徒の破法を擧げ破國の因縁を明す
- (4) 法然の破法を論ず
- (5) 撰擇集の非を彈じて法然の罪を同ふ
- (6) 法然詰責の上奏文を引く
- (7) 禳災の方術を明す
- (8) 誘法對治の方法を示す
- (9) 總して誘法の對治を催す
- (10) 客誘法對治の旨を領す

(1) 災難の由來を明す……客問ふ、近年の災危に就いて、祈禱を行ひ徳政を布くも、一向に効驗の無きは、禍源何れにあるのであらうか、三寶世に在し、百王未だ窮まらずにあるではないか。主人答へて曰く、萬祈を修するも顯應なきは、世皆正に背き、人悉く惡に歸するからである。

(2) 災難の經證を擧ぐ……客云ふ、今、蘭室に入つて

こゝに鬼神とは、廣く教法を指す、教法の亂るれば人心亂る、人心の亂るるは國家紊亂の基である、現代はかゝる憂ふべき危機に際會してゐる。

人は現實に屬し、また永久に跨る、人は現實と理想とを併せ有してゐる、されば、法華經の深き信仰と大聖人の國家觀念とあつて、以て、御皇室に冥し御國體に合して、初めて、眞の人たるを得るのである。

第三 立正安國論の概要

本書の主眼は、國家は教法に依りて安泰の基礎を得、教法は國家の興立を以て當面の本分となすべきを説くに在る故に、本書中に「國依法而昌法因人而貴、國亡人滅佛誰可崇法誰可信哉……、先祈國家須立佛法と云ひ、本書由來には「若毀壞此國土復佛法滅無疑者也」と宣せられた。

本書は主客を設けて、問答體に記述してある、大段十章あり、主客九章、客問十章より成る、段科の十章

初めて芳詞を承はつたが、さて、其の經證が御座りませうか。主人は、金光明經の、甚深の妙法を輕んぜば、善神國を去つて災難誑ひ起るの文、大集經の濁惡の國は善神去るの文、仁王經の鬼神亂るゝが故に萬民亂るの文、藥師經の他國侵逼自界叛逆の文、仁王經の賊來りて國を侵し百姓荒亂する等の七難の文を擧げ來つて曰く、四經の文は明かである、萬民誰か之に疑を挾まん、而るに、盲瞽の輩は妄りに邪説を信じて正教を辨へず爲めに惡鬼外道災をなし難を起すのである、と(3)佛徒の破法を擧げ破國の因縁を明す……客佛然として曰ふやう、上宮太子が守屋の逆を誅して佛法を興立してより已來、上下之を崇めてゐる、何ぞ三寶を廢すと謂はうぞと、主人諭して曰く、成る程佛闍は幾を連ね僧侶は輩の如くなるも、人倫に惑うて邪正を辨へず、仁王涅槃法華の文に依つて、今の世を照すに、鏡にかけて見るが如し、惡侶を誡めずは、善事をなすも由なきことである。

(4) 法然の破法を論ず……客猶は憤つて曰く、天下

(8)

龍象多し、何ぞ惡比丘と謂ふや。主人答ふ、後鳥羽院の御宇に法然と云ふものがあつた、撰擇集を作り、道綽の聖淨二門、曇鸞の難易二行、善導の正雜二行の謬釋に據つて、諸經諸論を排し、諸佛諸神を貶し、明りに捨閉闍拋を稱へて衆人を迷はした、これ近くは護持正法の誓に背き、遠くは入阿鼻獄の誠に觸るるものである、彼の高祈を修せむよりは、寧ろこの一因を禁ずることに全力を傾注すべきである、

(5)撰擇集の非を彈して法然の罪を問ふ……客殊に色を作て曰ふ、法然上人は、八宗を究め大藏に通じ、智は日月に著しく、徳は先聖に超えてゐる、何ぞ罵詈を加ふるや、我れ歸らむと欲すと。主人咲ふて之を止め且つ言ふ、辛さを麥葉に習ひ、臭きを溷廁に忘るといふことがあるが、蓋し汝のことであらう、法然が諸經諸論を排し、諸佛諸神を貶すの罪は竟に掩ふことが出来ない、唐の武宗の時、彌陀偏崇の説を奉するや、兵亂類りに至つて災火邑里を焼いたことがある、今法然は後鳥羽院の御宇建仁年中の出、彼の院の御事は既に眼

説には、其の施を止むる、其の惡を助くることなく、皆この善に歸せば、國家の泰平は期して俟つべきである。

(9)

(9)惣じて謗法の對治を催す……客は席を避け襟を正うして曰ふ、法然撰擇の謗法は顯然、早く佛界の白浪を收めなば、世は義農の世となることでありませう云々。主人の曰く、鳩化して鷹となり、雀變じて蛤となるとは實にこのこと、汝蘭室の友に交つて麻敵の性となつた、國土を安じ、現當を祈らむと欲せば、速に對治を加へるがよい、藥師經の他國侵逼自界叛逆の兩難、大集經の兵革の難、金光明經の他方の賊來りて侵すの難、仁王經の四方の賊國を侵すの難は未だ事實となつては居らぬが、今のまゝにしては早晚來ることであらう、國を失ひ家を滅しなば、何れの處に世を通れようぞ、一身の安堵を思はゞ、先づ四表の靜謐を祈るべきである、曲意猶ほ存せんか、早く有爲の郷を辭して必らず無爲の獄に墮つるであらう、此の隱霧の迷ひ、彼の盛煽の底に沈むであらう、汝早く信仰の寸心を改めて、

前に在るではないか。

(6)法然詰責の上奏文を引く……客聊か和らぐ、曰く果して貴説の如くなりとせば、釋門の棟梁何ぞ勸狀を捧げて上奏を遂げないのであらう。主人曰く、忝くも大乘を學して一佛の子と生れ諸經の王に事ふるからは、是非に、佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざるを得ない、去る建仁年中に延曆興福の兩寺より奏聞を經、敕宣と御教書とを得て、撰擇集の印行を禁じ、法然の墓を破却して門弟を流刑に處し、爾來未だ赦されて居らない。

(7)禳災の方術を明す……客はいよゝゝ和らぎ、法然か捨閉闍拋の曲説を悲しみ、禳災の方術を問ひ出した。主人は涅槃仁王法華の金言を引いて、謗法禁斷の大義を説く。

(8)謗法對治の方法を示す……謗法を禁絶するは斷罪に處すべきかと客の問ふに答へて主人曰く、佛子を禁ずるのではない、偏に謗法を惡むのである、釋迦已前の佛法には、其の罪を斬つたけれども、能忍以後の經速かに寶乘の一善に歸せよ、然らば則ち三界は皆佛國である、佛國いかでか衰へやうぞ。

(10)客謗法對治の旨を領す……客の曰く、文は明かにして理は詳かです、慈誨に接して癡心を開くことを得ました、速に對治を回らし早く泰平を致し、先づ生前を安んじて更に没後を扶けむ、唯た我の信するのみにあらずして、又た他の誤をも誠めんかな。云々

以上の十章、客問は災難由來の疑問に起つて謗法對治の領悟に終はり、主答は背正亡國の誠告に始まりて立正安國の明教に終はる、形影互に現すの巧妙、實に觀るべきである。

(完結)

鷲の山曇らぬ月を頼むかな

年經し法の水くきのあと

佛子の自覺

今 成 乾 隨

子を持つて知る親の恩と云ふ言葉がある、子を持たぬ迄は、親の恩を感じた度合と云ふものは、自分では随分深く感じた心算で居ても、子を持つた後の心に比ぶれば誠に慚愧の至りに堪えぬのである、自分が子供を持つて見ると其子供の完全なる發育を願ひどうかして立派なる人間に仕上げ、國の爲にも盡すような人にしたいと云ふ思は一日片時も去らないのである、子に對する慈愛の情は其時處位に拘らず、愛子を追隨して居るのである、言葉を換ひて言へば、兒童は親の慈悲界に生息して居るのである、親の慈悲の光は子供の身心を常にてらして居るのである、然るに親の心子知らずで我儘勝手手の振舞をなし恒に親に對して平然たる有様が多いのである、若しも子供が親の慈愛の精神を感じたならば、孝行の精神も起るのであらう、孝行の念が起れば、親に苦勞をかけては濟まぬとの感じが起つ

て来る、親の苦勞は自らに求むる處なくして、唯子供それ自身の完全なる發達及び活動を欲求するに外ならぬのである、されば孝行の一念發起は、完全なる人格となるべき立脚地である、人としての圓滿なる活動をあらはず實識である、子供にかくの如き子としての自覺が起つたならば、親の悦びは云ふ迄もなく、子供それ自身が如何に幸福であらうか

佛陀と吾等の關係も、亦親子の情を推して察知し奉ることが出来る、久遠の本佛は吾等に對して一子地に任し給ふのである、限りなき生命を有し大慈悲の光りを放つて恒に吾等を照し給ふのである、然るに吾等は佛陀の實在を知らず、従つて佛子なりとの觀念は毫もなく、徒らに平凡なる人の子と思ひ、五欲の境に馳せて醉生夢死するに於ては、如何に佛陀は悲愍し給ふであらうか、佛陀は生死無常を離れ一切の苦惱を離れし給へたるが如く、吾等をして生死病死憂悲苦惱の境界を解脱せしめんが爲め、毎自の大悲願大救濟があるのである、吾等一念だも佛陀の慈悲を感受したならば、

品の當體の蓮華佛とは、日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身全くこれなり」との金言に對し、誠に感涙に堪えざる思ひがある、此大思は如何にして報じやうか、曰く他なし、一切衆生に對し佛子の自覺を喚起せしめて、毎自の悲願に酬ひ奉ることである。

現在の生活状態に於て慚愧の情禁せざらんと欲するも能はざる次第である、此感動の刹那に於て、信行が表はれるのである、又信行の内合に於て佛陀の常樂我常の四徳の萌芽を顯はして居るのである、一たび此の心地に住すれば、人格頓に一變して靈格とも名くべき無限の法悦と權威とが何となく感じられるのである、例へば民の子と心得たりし孤兒が、偶然天尊の太子たることを自覺したやうな譯である、此佛子の顯はれれば、本佛の歡喜し給ふは申す迄もなく、吾等それ自身の幸福は、到底測量し得べきものではないのである、然らば如何にして佛子の自覺を得べきやと云ふならば、本佛の實在を信じ、南無妙法蓮華經と信唱すれば、こゝに感應道交して佛子の自覺を得るのである、本來佛陀の知見と我色身と妙體同一なるも、吾等は本佛を忘れたるの罪によりて、自らの色心を卑しめたのである、然るに、此信念口唱の妙行によりて『妙覺の釋尊は吾等が血肉なり、因果の功德豈骨髄にあらすや』との、聖語を味識することが出来るのである、『本門壽量

子をおもふ親の教のなかりせば

かりの宿りにまよひ果てまし

御消息文を透して見たる 日蓮上人の人格

國友 日 斌

御消息文を繕いて直に眼に映じ来る上人の人格は、非常に勇氣に充ちた御方である事である、上人の御一代は世人も熟知する如く、終始大法難大迫害裡に奮闘せられたものであるが、まづ尋常人の考では、時として真に苦しい事つらい事があつたこと、拜察せらるゝのでありますが、上人の御消息を拜見すると、決して弱いことを仰せられて居らぬ、いつも勇氣に充ち満ちた態度を御示しになつて居るのである、伊東の流罪當時、工藤左近尉に御遺しになつた四恩抄には「去年の五月十二日より今年正月十六日に至まで二百四十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、其故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行往坐臥に法華經を讀み行するにてこそ候へ、人間に生を受けて是程の悦は何事か候べき」と仰せになり、又龍の口

の刀難當時、土不入道に御遺しになつた御消息には、「いままで頭の切れぬこそ本意なく候へ」と宣べられ、又佐渡の流罪に對しては、佐渡御勸氣抄に「かゝるめに値候こそ法華經を讀むにて候らめ、いよいよ信心もおこり後生もたのもしく候」と仰せになつて居る、斯くの如く法難に對して苦痛を訴へる所か、そこに非常なる勇氣と心からの喜びを御示しになつて居るのである、幾分は門弟信徒を激勵せんとの思召もあつたらうが、而し上人の勇氣及喜びは決して表面だけを飾られたものでない、又無理に情をこめて仰せになつたものでないので、心の奥底から溢れ出でたものと拜察せねばならぬ。

試みに佐渡當時の御消息に就て考察して見ると、寺泊御書に「又自本存知之上始非可歎止之」と仰せになつて居る、上人の一代及其著書を拜見すると、善無畏抄に「日本第一の智者となし給へ、虚空藏菩薩眼前に高僧とならせ給て明星の如くなる智慧の寶珠を授けさせ給き、其しるしにや日本國の八宗並に禪宗念佛

宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ」と仰せになつて居る如く、始めその主義主張を定めて、之を提げて大に國家を諫め時代と戦はんとせられたのには、多年研讀に研讀を重ね考察を加へて、當時のあらゆる宗教學說を玩味し大藏一切を讀破せられた上人なのである、即ち上人一代の主義主張は、極めて確乎たる眞理と自信の基礎の上立つて居つたのである、而して此の自信が更に寺泊御書に、「數々者度々也日蓮擯出度々流罪二度也」とあつて、數度の法難將に今、佐渡へ二回目の流罪によつてその身は勸持品の數々云云の如來の豫言に符合せるのであり、今迄は上行の先驅として「あら〜法門を申さん」と御考へになつて居たのが、茲に至つて、我こそ如來の勅命を帯びて末法に法華經流布の大任を有せる上行の再誕であるとの堅き信念自覺を起さるゝに至つたのである、故に土木抄を拜見すると、「佛滅後二千二百餘年に月氏漢土日本一圓浮提の内に天親龍樹内鑑冷然外適時宜、天台傳教は略釋し給へども弘三殘之」二大事の秘法を此國に初て弘之、日蓮豈非其人乎

乃至經云有四導師一名上行」と仰せられたのである、即ち從來充分なる研讀によつて築かれたる眞理に對する自信は、更に經文符合の實證に依て裏書されたのである、從て又從來國士として大に國家を諫め時代を匡正せんとせられた、抱負が一層強く且明瞭になつて來たので、遂に開目抄に「我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん」と、實に偉大にして且強い御言葉を御示しになつたのである、斯の如く、上人の佐渡流罪に對する感慨は、當面の苦痛迫害を歎き悲しむと云ふよりは、この流罪によつてその自信を一層強められ又その地位天職を明確に指示せられた譯であるから、そこに心からの満足愉快を感ぜられたのである、故に寺泊御書の「自本存知の上なれば」との御言葉は、上人凱歌の聲と拜察すべきである。

又佐渡御勸氣抄に「いたづらにくちん身を法華經の故に捨てまつらせんこと豈に石を金にかふるにあらずや」及佐渡御書に「身命に過たる惜き者のなければ是を布施として佛法を習へば必ず佛となる」と仰せにな

つて居る如く、この流罪によつて過去世の衆罪を消して無量の功德を積むもの、又行住坐臥經文讀誦に當れりとの信仰の上より發し來る喜悅であつて、從て非常なる勇氣もあつたのである。

斯の如く上人の法難に對する勇氣と喜悅は、眞理の自信とその實證、及びそこに見いだされたる自己の天職と抱負、且つ信念功德等は幾多確實なる基礎の上に築かれたる實に強きものであつたのである、故に新尼抄に「かまくらにも御勘氣の時千が九百九十九人は墮て候人人も」と言はれて居るが、度々の法難に上人を捨て去る門弟信徒も多かつた、又佐渡御書に「日蓮御房は師匠にてはおはせども餘りにこはし、我等はやはらかに弘むべし」とあつて、上人の布教方針に對して異議を挟むものもあつたけれども、其等は毫も上人の覺悟及方針を動かすに足らず、却て土木抄に「但生涯自本思切候于今無翻返乃至又無違恨」と云ひ、「鐵は炎打てば劍となる、賢聖は罵罵して試みるなるべし」との實に強ひ御言葉がある、されば上人は大に鎌倉留守中の門弟信徒共を激勵して、「空に讀み覺える老人等は

兒童教育と宗教心

井 村 日 威

兒童の教育問題は、古今を通し洋の東西に亘つての大問題でありまして、實に難解の謎となつて居るのである、家庭に於ける父母、學校に於ける教師は、これが爲めに少なからぬ努力を爲しつゝあることは皆様の御承知の通りの次第であります、然しながら何れも理想の通りの効果は挙げ難き様に思はるゝ、専門の學者が苦心研究の結果を實地に應用せられて居るのであるから、夫が實効が擧らぬと云ふことは無い筈であると思ふのに、其効果が思はしく無いのは、何處にか教育上に不充分の處があるのではあるまいか、自分共の考では現今の教育はあまりに智育の方面が閉却せられて居るのではあるまいかと思ふ、之に反して往昔の教育は知識を與ふるよりも、道義の觀念を與ふるに重きを置きて教育を施して居るが、教育者をして批評せしむ

具さに聞き奉れ早々に御免を蒙らざる事は之を歎くべからず」との御言葉の如きは、いかに上人の精進勇猛の強さを窺ふに足るのである、而て更に上人の勇氣は、決して一時的の火の如き性質のものでない、充分に持久性耐忍性を帯びたもので少しも敵を恐れず、火の中水の中へも突進するとの積極的動的勇氣の半面の上に、いつまでも困苦に堪へ迫害を忍ぶ底の消極的靜的勇氣を考へねばならぬ、故に或は佐渡流罪の永引ひな場合にも門弟共を諷めて、「日蓮の御免を蒙らんと欲するの事を色に出す子弟は不孝の者也」と仰せられ、上人自らは「我等は流人なれども身心共にうれしく候也、大事の法門をば晝夜に沙汰し成佛の理をば時々刻々にあぢはう、如是過ぎ行き候へば年月を送れども久からず過る時刻も程あらず」と仰せになつて居るのである、而してこゝに上人の勇氣に就て特に注意しなければならぬのは、上人の勇氣は決して猪武者的でなく極めて思慮周密中心堅實なものであつたことで、その間の意味は晩年四條金吾に御與へになつた御消息、即ち「免與同罪抄」「四條釋迦御供養」「四條抄」「崇峻天皇抄」「四條抄」「四條抄」「四條抄」等に於て、充分に明かに伺はれるのである。

るならば不完全の教育なりと言はんも、其結果は寧ろ近代の教育よりも往昔の方が勝れて居る様に思はれる、現今の教育は徳育が充分でないから、折角學び得た知識を善用しないで、悪用するものが多くなる様である、教育の進むに従ふて罪惡を爲すことも巧になり、惡事の手段は文明の恩恵を悪用することに依つて益々進歩して居るのである、一面より觀察すれば罪惡を教ふるのが現代の教育であるとも言はれ様と思ふ、現代の教育が單に科學萬能の思想に依りて、一にも科學、二にも科學で押し通さんと爲したる結果が、道徳の根底甚だ薄弱にして、徳育の基礎動搖して、修身教授の上に其中心を失ひ、教授其れ自身すら何等の力をも認め得ざる状態である、縦令學科目を尊重して校長の擔任と定むるとも、何等の信念をも有せざるものが千萬語すとも、教育上効果の擧げ得べきものではあるまいと信ずる、現代の教育は大に完備せりとは言へ、此點に於ては遺憾ながら満足することは出來ぬのである、私には今の教育者が科學萬能の思想を離れて、今少し遠大

の理想に向ふことになつたならば如何かと思ふ、現今の様に道徳を單に人と人との約束として淺薄なる意義に解釋して居る様では到底効果ある徳育は施し得べき事では無いと信する、今の教育者は徳育の方法に宗教的意義を加へるのは往昔の事で、今日の學者は取らぬと言ふては居りますけれども、現今は有名なる教育大家が、言葉では宗教と云ふことを嫌ひながら、事實には其意味は往々用ひられて居るのは少々妙な感じも致しますのであります、私共は寧ろ明白に宗教的意義を合された方が教育上効果があると云ふた方がよろしくはなからうかと思ふのであります、最も今言ふ宗教的意義とは、所謂宗教に言ふ所の純粹の信仰を指すのではありませぬ、又一定の宗教を指して言ふのもありませぬ、單に宗教心の萌芽を言ふので、一般宗教の通有性たる、吾人已上に靈力あり活動あるもの、存在を認め、之が永久の生命と無限の光明を具へて完全なる實在者があると云ふことを認むる、其考を兒童の腦裏に植込むで置かねばならぬこと、思ふ、兒童は教育上服

あると思ふ、父母は朝寝をして居りながら兒童に早起を命ずるも何の効力はない教師は煙草を呑みながら煙草の害を論ずるも服すべき筈がない、箇様な工合に單に人と人との關係にのみ見て行くならば、何れも缺點だらけのもの計りであるから、到底効果ある教育は施し得べきでないと思ふ、現代の人類の上に何等の缺點なき模範人格を見出して、其標準の下に教育を施し得るならば甚だ結構の事ではあらうけれども、今は望み得べくして行はれ難き事であらう、然らば効果ある教育は施し得ずとの結論に歸着する様に思はる、現今の教育が但に人と人との約束として道徳を説明し徳育の根本を論じたる其結果は上の如き心細き次第に爲つて居るのである、最も今の教育が歴史上の人物を模範として教育を施しつゝあることは一應結構の事ではあるが、此等の模範人物に永遠の生命と無限の光明とを附與しなかつたならば、一死物木偶と等しきものと爲つて仕舞ふて、生命ある教育は施し得るのである、私共の考へでは、其歴史的模範人格に宗教的意義の永遠の生命と無限の光明とを與へて、模範人格の實在を

從勤勞自重等の習慣を養成せねばならぬのであるが、此習慣を養成するには、養成者たる父母教師等の保護者が其兒童に對しては、絶對の權力者でなければならぬ、兒童に實例を示して指導し命令を以つて實行せしむる處のものである、兒童は父母教師の行動を模倣し、其言語を相似て發達して行くのである、故に其手本の任に當る父母教師は、自らの行動に大に注意を拂はねばならぬのである、然るに世間多數の父母教師は果して完全なる手本と爲り得るか何うか其疑はしき次第であります、吾人の實驗上に依れば、小兒の出生より五六年の間は父母は絶對の信頼を受けて、其命令には服従するが、漸く長じて、就學するに至れば學校教師は絶對の權威者となりて、家庭の父母は大に輕せらるゝの風を爲す、更に長じて中學校に入るや、其教師を輕視するの傾向あるを見るのである、是は何故であるかと言へば、其兒童の眼に父母の缺點若くは教師の言動の不一致等が往々映じて來るから、曾つて絶對の信任を拂ひしものも、漸く其信用を減する様に爲るので

認め尊重せしむることを得るならば、其處に始めて力あり權威ある教育が、施されやうと思ふのであります、今の教育者が宗教排斥の誤想より、教育其ものゝ効力を稀薄ならしめつゝあるはお氣の毒の次第であります、然し近來の教育者中にも幾分か其點に考を持つて居らるゝ人がある様に思ふ、我國教育界の泰斗大村仁太郎氏が「我子の美德」と題して、獨逸教育界の大家ザルツマン氏の「理想的教育」を翻譯せられたる中に「松の下蔭」なる一章あり、其中に

吾が松下家にとつては此天空を摩するばかりの一本の松の木が實に無限の教訓と祖先以來の歴史とを藏して居る様に見えるのです、中略、祖先より私の先代まで連綿廿一代皆由縁の色深き此松の下蔭で育つたのである、此一本の松の木が私にも両親にも一種異様の壯嚴なる威を起させるのは全くそれが爲です、中略、「松下家の喜と愁とが常に此松の下に於て相談せられ又此松の下で愁を轉じて喜と爲し、喜をして一層更に大なる喜と爲したるは、繁藏お前も知つて居やう」

右様の事で、松の大本に大なる意義を含蓄せしめて神聖視し、教育の資料に採用して居るのは、現今の教育者が宗教を排斥しながら、斯る教育の方法を採用するは、諺に言ふ、問ふにおちずして語るにおつるの格であるまいか、又文學博士中島力藏先生が、去四十一年感化救済事業講習會の際實踐倫理の講演中に

單に一箇人として子供を罰する権利は持つて居らぬ、何處に親が子供を罰する権利があるかと云ふと、親と云ふものは其家族を代表せる一家の長であつて、其一家を代表して罰するのである、家族は其祖先から今日に至るまで繼續して居る處の意志を有する團體である、親が子供を罰する時は其團體の意志を代表して居るのである、子供が親を叱るのは一個人たる親が叱るのでは無い、罰は親か個人として任意に自分の機嫌で賞たり罰したりするのでは無い、家族祖先の意志を代表して一家の精神を代表して、所謂家風と言ふものを代表して罰するのである此御説も前同様であるので、斯様な意義を含蓄して論ずるに就ては、其處に宗教的意義を無視して仕舞ふては、祖先と言はうが意志を代表すると言はうが、畢竟無意義になつて仕舞ふてあらうと考へます、宗教的

宇宙第一の寶典に就て

野 口 日 主

昔より論語を以て天地間第一の書なりと云へり、今予は法華經を以て宇宙第一の寶典なりと云ふ、所以者何、法華經は盡十方三千法界の本佛を開顯せり、法華經は爾前諸經に熾種破石と嫌はれたる二乗作佛を宣說せり、法華經は十萬億土等の迂遠の土を排して、娑婆即寂光本國土妙を顯示せり、語を換て云へば、法華經は宇宙の大本を開示して、天事人事一切の根元、及歸趣を教へたる最善最上の書なり、文字なり、其流傳より云へば、古往今來諸子百家、一切世間の諸有る善論よりも、法華經は最も多くの人々に尊讀せられたりと云ふ、眞に衆星の中の日天子の如き也。

我國聖德太子は、法華經を以て鎮護國家の寶典と尊め、傳教大師は皇室守護の本命となせり、日蓮上人は、更に法華經の眞神髓を發揮して王佛冥合圓淨統一を主張せり、上人常に云く

意義即永久の生命が祖先にあつて始めて祖先の意志を代表する意味があるのであらうと思ふ、要するに現今の教育家其自身も宗教的意義が無ければ兒童の教育は充分でないと言ふことを認められて居ると云ふことは明瞭と信じます、我國古來より祖先の名を辱かしむるな、悪いことをしては祖先に對して濟まぬと云ふことを以つて常に兒童を教育し兒童も腦裏に印して發奮して居つたのであるが、今の兒童にかう云ふ觀念は少しも無い様に思はれる、又我國には家々に佛壇があつて祖先の靈位を祀り、祖先の靈位は永久不滅であることとか教へられて居るから、今更ら松の下蔭も必要はないのである、現今の教育上の金科玉條たる教育勅語も宗教的意義を離れて之を解釋し説明せんとするならば、其根本の意義を充分に發揮することは出来難きものと信するのである、以上兒童の教育には是非宗教的意義を加へねば効果ある教育を施し難いことを御話し致したのであるが、兒童に植付たる其萌芽が漸次生長して、やがて一家に對しては孝順の美德として顯はれ、國家に對しては忠良の臣民と爲り、社會に於ては勤勉の一員として有用の人を作り得ることになるのであります。

一圓淨提第一の本尊可立此國

佛法必ず東土の日本より出づべきなり

日本國は八萬の國にも超へたる國ぞかし

我日本の柱とあらん

と、更に法華經を謂て云く、

十方三世の諸佛の微塵の經々は皆毒量品の序分也

と仰せられ、宇宙第一の法を弘むるに宇宙第一の國を擇ぶ、聖意甚深、惶きことながら後醍醐天皇は、手に法華經を握りて御崩御あらせられ、楠氏は法華經を手寫して神社佛閣に納めたりと云ふ、然れども南風不競世は尊氏の占むる所となり、大義地に墮ち名分茲に湮る、豊大閣草莽より起り勤王の志ありしと雖、難波の事は夢の夢となりて政權徳川氏の手に歸せり、於茲諸種の厭世主義の宗教は、徳川氏の消極政策と相結び、頻りに立正安國主義を壓迫す、當時、常樂院日經上人等不惜身命の忠節に依りて日宗一縷の命脈を保ち得たるも、春風秋雨三百年、國體蔭晦と共に法華經の主義は世に多く忘れられたり。

明治維新庶政更張、未曾有の盛時を見るに到りたるも、世は物質文明に没々として名教維持に重きを措かざるの結果、混亂危険の思想となれり、國民恐懼戒愼して大に覺醒すべき時なりとす、此時此際、宇宙の法典法華經一部を家毎に備へ、國運隆昌と風教振興とに可資也。

昔は奈良朝、勅して家毎に孝經一部を備へて、百行の元たる孝道に資せしと云ふ、今の時に際り、一切の解決者たる萬善萬行諸波羅密、包容統一主義の眞實歸趣を示せる法華經を家毎に備へ、人毎に受持するは眞に急務中の急なりと信す。

源濁りぬれば流不淨
身曲りぬれば影不直

(新道二七七)

に開顯せられ、戒定恵も教行證も此に於て根底あることになれり、毒量品を除いて佛敎を談らむか、空中に樓閣を描くに異ならず、毒量品なくむば天に日月なく、人に魂なからむが如し」とは、敢へて日蓮上人の自讃にあらず、夫れ、眞如法性の理法を以て、力ありとし生佛は之に醇化せらるゝものとするは、恰かも上天の思想と簡ふなき、淺薄なる考想と謂はざる可からず。

靈化したる釋尊は、眞理の顯現者なり、活ける人格を有する釋尊の壽命は、永遠に生けるなり、これを具體的實在といふ、人法の光顯は此に存す、この故に釋尊は法華經に依て醇化せられたるにあらすして、法華經は釋尊に依て醇化せられたるなり、宗教の精神宗教の目的は、この點に於て意識すべし、毒量品はこの意義を、最も明晰に説き遺憾なく發揮したり、醇化せられたる本門の戒定恵は、毒量品に於て擔籠和合せられて良藥となり、生ける釋尊は感應の本主として良醫となり、この教法を信受する我等は、佛の愛子として此に救濟

光風錄

笹川眞應

「統一團成る、常設法教化の法輪、長へに響かむ、予や悦びに堪へず、左の一文を寄せて、歎んで感意を表す」

戒定恵と教行證は、宗教通途の談柄にして各宗互にその特長を誇る、從來、佛敎に於て戒定恵の三學といふ、これに於て八宗兼學の弊を生じ、如來施化の綱格を滅却するの故に教行證に於て、混同の偏見を起す、兼學は教法を藝能視し、混同は糊塗を事とす。戒定恵と教行證は、佛敎における凡ての教典に包含せられつゝあり、然れども敎理の淺深等によりて、その功能に優劣あるべきは、素よりその所なり、これが淺深優劣功能を判定する爲に、敎相論の必要となり、正義の嚮ふ所邪見邪義の亡ぶる、已むを得ざることに成り、偏見の趨く所糊塗の生ずる所、遂に分裂的宗派の我執に囚はれて、宗教の精神と目的を侮蔑するは、洵に哀むべなり。

釋尊一代の佛敎に於て、その眞理は法華經毒量品

せられ、父子の道義は確立して、努力となり誠信となり、所謂、宗教の精神と目的は、簡明に意識せられ得べし。

日蓮上人は、毒量品におけるこの意義に於て、「宗とは戒定恵なり」と述べて、權小諸敎の戒定恵を打破し法華經は釋尊の宗なる所以を宣揚し、妙法蓮華經の五字の要法を受持することを勸奨せられたり、擔籠和合の良藥たる、妙法五字に本佛釋尊の戒定恵は、包まれて我等はこの五字の要法を受持すれば、本佛に對し感應道交することを得るなり。

要するに釋尊は活ける法華經なり、法華經は活ける釋尊なり、日蓮上人の熱誠なる信仰は此にあり、我等も法悦に生きるの信仰なかるべからず、凡そ八萬法藏の廣さも一部八卷の多さも、但五字を説かんがためなり、靈山の雲の上、鷲峰の霞の中に釋尊要を結び地涌付塵を得るとありしも、法體は何事ぞ此の要法にありしと、また以て宗旨の精神を窺ふに足む、誠に生死を恐れ涅槃を欣び信心を運び渴仰を致さば、遷滅無常は

昨日の夢菩提の覺悟は今日の寤なるべし、たゞ南無妙法蓮華經と唱へて、滅せぬ罪やあるべき來らぬ福やあるべき、眞實なり甚深なりこれを信受すべし」と、これ又信仰によりて、靈光と活力を實現すべき、日蓮上人の適切なる教訓にあらすや、我等斯かる偉大な本化宗旨の精神と目的を具有する、何爲、自覺奮起せらば。

○帝國海軍の勢力

帝國海軍の現在軍艦六十三隻四十五萬六千五百五十五噸にして目下製造計畫中の軍艦は十二隻十九萬七千五百噸、之を現在勢力に計算すれば總計七十三隻六十四萬七千八百五噸なり

現在軍艦

一等巡洋艦	十三隻	一、九一、三八〇噸
二等巡洋艦	九隻	四、三八、四八三噸
三等巡洋艦	九隻	二、三三、九一八噸
海防艦	七隻	一、七三、七六六噸
水雷母艦	六隻	一、四一、七三三噸
水雷艦	五隻	一、四一、七三三噸
水雷艇	五十五隻	二、二二、八一六噸
潛水艇	五十七隻	二、二二、七三噸
水雷艇	六十二隻	二、二二、八一六噸

史的人物の説明に依りて喝采を博して居るが、客月某館日蓮上人一代記の幕を開くや、三十日間非常の好評を以て大入滿員の盛況を呈したなどは、特に注意を拂ふて觀察すべき事實であると思ふ、いまの世の多くの人が現實の一時主義であるに拘はらず、英雄の風采に憧かれて精神的快感を覺ゆるものあるは、即ち少なくとも偉人渴仰の心的欲求に促がされつゝあるので、日蓮上人の如き大偉人の人格に接觸せんとして居るのであるまいか、吾人は兎に角欣ぶべき時代の傾向であると察する、而して吾人はこの時代の要求に應じて上人の人格を説明するには周到の用意を爲さねばならぬが、在來上人の人格に就ては、人格と教義とを全然分離して解釋して居つた、けれども分離の説明では意義を徹底するに到らぬと思はれる、何せかと云へば、上人の人格は單に史上に現はれたる偉人傑士とは全然其本質が異つて居る、故に上人の著書及消息文を窺はば、勇氣慈悲及信仰を統一したる人格に接するので、決して分離的に觀てはならぬのである、上人が六十一年間、

淺草公園と現代人要求の人物

三 上 義 徹

現代人の思想の傾向は、淺草公園の一區劃に現はれて居る、淺草公園は物的欲求を充たすべき機關が完備して居つて、いまの現實主義一時主義自然主義の思想が遺憾なく行はれて居る、故に現代思想の趨勢は公園全體の設備を觀れば疑ふべくもなく直ぐ解るのである、宗教方面に於ては、觀音堂及附近の神社佛閣によりて其淫祠迷信の頗る盛んなるを知り更に劇及活動寫眞等の娛樂機關によりて二種の反對せる潮流を見だすことが出来る、其二種の反對せる潮流とは何であるか、即ち一は淫靡卑俗極まる觀世物である、一は娛樂の中に訓育を意味せる歴史ものである、而かも近來殘忍無道の筋書者は壓せられて、偉人傑士の幕は非常の盛況である、茲を以て見るに、物的欲求を充たすべき淺草公園の状態は、心的欲求者に向て其設備を爲しつゝあるの變狀を呈して居る、彼の活動寫眞の各館は何れも

積極的奮闘活動には溢るゝばかりの大慈悲を包み、又優さしき情愛のそこに訓戒激勵の御心が含まれて居る、それは上人の著書自傳の説明する所である、上人が鎌倉當年、自己の天職と主張を遂行するが爲に、北條政府に向て名分を正し各宗教に折伏の鐵鎚を加へ、正々堂々風發の論陣を張つたので、後世誤て上人を解釋して居るものは多いが、上人は空理空論の方でない頗る透明なる判斷によりて理義を正し之を事實に行ふたのであつて、活動の根底にはつねに深き慈悲の情がこもつて居る、凡てが單純なる意義のものでない、例せば種々御振舞抄の一通の聖文に於て、各方面の意義が表れて居るが如くである、同抄を拜するに、「日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣つづきて加葉阿難にも勝れ、天台傳教にもこへよかし」と仰せられ、門弟信徒の自覺を強め、折伏の元氣を鼓舞策勵して居らるゝが、次下に、「今度頭を法華經に奉りて其功德を父母に向せん、其あまりは弟子檀那等にはよくべし」と宜べられ、法華身讀の功德は孝養のため父母に捧げ、

また門弟信徒にも頌與すべしとの優さしき御言葉は、いかに孝養に厚くして慈愛の深きかを拜することが出来る、更らに又同抄には、眞實に法華經の文意を身讀したるを悦んで、「數々見指出の明文は但日蓮一人也、一句一偈我皆與授記は我也」と、上人の艱難は法華經の實行より來るので、教義の發揮の運動に因て人格は組立てられて居る、千百の艱難を苦痛とも或は給はざる其宗教的信念の基礎の上に、鍛へ上げられたる貴と大人格は、もはや吾人の付度し推量し得ざるものであるが、法華經の文々句々悉く眞實なるを身讀して證明せられたる、そこに上人の偉大なる人格の靈力は存するのである、

さらに彼の有名なる土籠御書を窺はんか、一篇二百有餘の文字は、確かに上人の人格が權威と慈愛とを以て活躍して居るのを知るのである、上人は當年、佛天の御計らひにて龍の口の劔難を去るや、さらにまた、「庭には雪つもりて人もかよはず、堂にはあらし風より外はをとづるものなし」と云へる佐渡流罪をうけ

に、宗教徒の天職及自覺を教へて其の確信と覺悟を固めしむる底の堂々たる大文字は、いかに上人の人格が各方面の意義を包含し之を統一したるものなるか、拜察し得らるゝのである、而して斯かる偉大なる人格は、唯だ單に歴史上の英傑を研究するの態度に於ては、其半面をだも理解して人格の靈府に入ることとは出來ぬ、撰時抄に「我弟子等心みに法華經のごとく身命を惜まず修行して此度佛法を心みよ」とて、實驗的信仰を奨めて居らるゝが、上人の人格の靈氣に觸らるゝには、亦必ずこの聖文の如く熱烈なる信仰の力に憑らねばならぬ、若し夫れ純正堅實なる修行門に入るを得るならば、即ちそこに尊き人格の靈氣を直感することが出来るのである、されば諸法實相抄に宣べ給へる、「一圓浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへてあひかまへて信心つよく候て三佛の守護をかうむらせ給ふべし」との聖意を身讀することが大事である、而し世には、研究未だ深からざるに「信じさせ給へ」と云ふは妄信を勸むるものなりと云ふ學者もあるが、それ等

たる慘劇の間、門弟日明が法難に逢ふて土の牢に苦しみ給ふに對して「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今夜の寒さに付ても、ろうのうちのありさま思やられていたはしく候へ」と、門下の身を思ひ案じての満腔切々の熱情は、いかに優さしく麗はしく亦尊とげなることではないか、彼の孝子日明が嬉しさの感極まりて泣いたのも無理でない、而して其次下には、「あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば」と仰せられて、日蓮門下たるの印可を與へ、多怨難信況滅度後の經文を身讀すべき自覺と信念とを策勵し、更に現在土の牢法難の生活は、正しく佛子たるの地位を得べき行門であると讃歎せられ、「天諸童子以爲給仕刀杖不加毒不能害と説かれて候へば別の事はあるべからず」と宣べて、強烈なる自信と法悦の慰安を與へ、この如説の修行に努むる人格は無限の靈力を存し、迫害身に當るも何等の苦しみを感じずべきものでないと思はせられて居る、いまこの土の籠御書一篇に見るも、無限の情をこめたる師弟の關係を發揮すると共に一應道理あるが如きも、徒らに學究的に論議を構ふるもので取るに足らぬ、宗教入門の要は、其智解ある人と雖教義の大綱を討査して正しさを認めたりとせば、唯自己の小智解に誇りて信仰を輕視してはならぬ、信仰ありて智解彌明了となり、積累徳の結果こゝに人格は成るのである。

現在の淺草公園に於ける太閤や家康や佐倉宗吾郎の傳記は、善い傾向には相違ないけれども、之等を以て心的最後の欲求を充たすことは出來ない、我日蓮主義者は、「我もいたし人をも教化候へ」の聖訓を體し、時代の要求に應じて國民思想の針路を示し、活ける信仰を與へて平和と安慰を得せしむべく、さらに一段の奮勵をせねばらぬと思ふ(四月十日淺草田圃知見會に於ける講演の大意也)

廣宜流布

法印實性

山さくら匂ひを風にまかせてぞ

花のさかりをよそにしらす

東京 天晴會

天晴會は日蓮主義研究を基礎として其討究自由である故に上人の人格反主義は各方面より観察せられ亦この主義と教育政治国家との關係に就て諸名士によりて遺憾なく調査せられて居るに例へば例多に卓拔なる研究を發表して我主義者に多大の資料を與へられて居る三月の例會は二十三日九段坂上高士見軒に開いた定期に至るや姉崎文學博士は壇上に起つて宗教教育家の會合問題より説きおこして個人と國家との關係に進み「個人が成立するならば國家も安全である個人の人格主張の一切が完全ならば國も安全に昌へる儒教では修身齊家治國平天下と云ふが即ち個人の基礎を固める意味である個人は智徳を進むるのには大專だが國家を眼中に置かねばならぬ個人と國家とは利害休戚を共にするものである個人の人格が確かなるときは國の理想と力とが結び付いて居るべきである」と論じ更らに儒教と佛教とに論議を進め「徳川時代は武士は儒教婦人は佛教と云ふ風に一家族にても反抗的に二個の主義を採つたが教育も宗教も相反するものではない各其分界を守りつゝ提揚して進むことと出来る」と多々の例證を引いて說明を與へられた何つもながら博士の論議は條理整然論議該博なるものである次に本多大僧正は本誌巻頭に掲載せる講題にて滔々たる熱辨を振つて立正安國の大精神を發揮せられたのは近來有益なる講義であつた

四月十三日午後四時より帝國大學構内舊御殿に例會講演を開かれた高島平三郎君は「人格

的宇宙觀」と題して理解の大門を平易簡明に述べられた「今の學者は宇宙を機械的に見る者がある物が化學的作用によりて自然に運行するが如しである」と亦精神的に見るものがある即ち人格的存在なりとする者で人間以上の神或は佛によりて人間世界を導きつゝ居ると云ふのである思ふに宇宙其ものは久遠の本佛であつて草木國土有情非情は皆久遠本佛の顯現であると感じられる他の具體的のものが宇宙の個々を現はして居る我々の人格は物質を透して活動して居るが無限に存在するものである人々の意識に入るならば不生不死の人となるのである而して宇宙は時々刻々に進歩して居る之を發見することが信仰である日蓮上人の如きは上行の再誕ではなくして眞の上行である本佛の現はれである意識が明であつて指導力を有する者が本佛の表はれてあるから之を模範として進むべきである」と論明して宇宙の個々の現はれば皆本佛の活作用に屬するものなりと結び五島子爵は日蓮主義と縁多と題して其詳細なる縁多に關する調査を述べ現今の特別亂落は愛郷心強くして信仰を有する一般より排斥することなきも我日蓮主義を以て啓蒙開發すること少なきも我日蓮を見ることが出来ると思ふとて其所見を發表せられたるが實に興味ある問題であつた一同食卓に就き相對して所感を交はし宮岡幹事の紹介にて新入會員を告げらる

海軍 中佐 市原卯之助君
東亞實業社主筆 方山正 隆君

親善會

三月 日淺草吉野町圓常寺に開く同會附近は有名なる龜岡町玉町町淺草町の労働多にして時間を節して講演を聴き精神修養を勤むるものもあるべきかと思ひたりしが參觀者比較的多くして盛運に向ひつゝあるは欣ぶべきことと云ふべし此日定期より横山基正君の現代に於ける宗教研究の弊を痛撃して信仰の大事なるを説き山根權正は靈化恩の題下に佛陀の意義と慈恩を明かにし父子の關係を示して慈恩を教へられたり講演後伊東甚尾氏の清澄山初轉法輪の講談ありて特に聽衆の感を惹くものありたり

實業青年會

四月一日午後七時より淺草法成寺に開く同會は會名の如く實業家の青年子弟多く其態度頗る眞面目なるは款實すべきこととなりと同日は熊井本光師人として精神修養の缺く可らざる所以を論じ井村日成師は日蓮上人と法華經との關係に就て上人の活動奮闘が法華經の實行に存せしを説き法華經は日常生活上の教訓にして上人は之を實行したる所以を明かにし法華經の實行は信仰なりとて信仰を勤めて教會したるなり

思恩

四月五日午後七時より淺草水住町妙經寺に開かれた同會の參觀者は例會ごとに其數を増し著しく發展を來したるもので何となく愉快である而して其機會に於て日蓮主義の妙致を精神の

小西法士は人生福藪あるは免れざる所なるもこゝに精神の修養と信仰とを存せば儼然として樂觀に居ることが出来る」と述べ井村日成師は家庭の教育の力と効果とについて詳細なる懇示を爲し餘興として薩摩琵琶などありて中々の盛會であつた

城南 教報

三月十二日午後二時妙國寺に於て正法護持會の例會を開く本多大僧正の日蓮主義と御國體に就て懇切なる御講演あり同三月廿一日更に開催信仰なき人の事業は生命なき精神なき旨を述べ懇諭せられたり

三月十七日午後一時妙蓮寺に於て養徳兒童會第八例會を開く並川山根兩師の訓誨あり杉田田中兩少嬢のお伽喃あり且川上某が養徳會に對する作文を朗讀する挿兒童教訓の實を着々擧げつゝあり全月二十日午後七時交親會の主體にかゝる通俗演あり當日は關田布教師が信智一體に關する有益なる法話と今成師が信念口唱に就て周到なる說明あり頗る盛會なり

三月廿七日午後二時本光寺に於て經王會の演説あり今成師は開目抄を引用して愚孝と報恩を述べられ並川師は法財に就て舜に至孝の人なりとの徳は幾々乎たりとの語を擧げて無見頂相に釋尊の偉大なる人格なる所以を説明せられ三上統一記者は時代思想に對しあらゆる現證を引いて論ぜられ現代人心の趨く所演劇活動寫眞に依て證明せらるゝ所以を述べられ強健なる國民の特性は日蓮上人の如き崇高なる峻烈なる人格に依て化せらるゝことを述べ

石田 顯 隆君
さらに談話室に於て各自の意見を吐き歸途に就いたのは午後九時であつた

地明會

日蓮主義より親たる婦人の立脚地や家庭及社交に關する用意は諸名士によりて講演せられ各自熱誠の研究は已に信仰に入りしものも多きに至り三月十七日午後一時より青山安川邸に第九例會を開く井村權正は本誌に掲載せる兒童教育と宗教心に就て論じ本多大僧正は佛陀の鉢相の嚴然として美妙なる莊嚴のありさまを示し廣大なる知見を説いて佛陀の偉大なるを明かにし一同の感を深ふものありしは會員の談話によるも知るを得るなりされば本會がいかにか強き感化を以て婦人の地位品性を高めつゝあるか窺ふに足る也

知見會

同會は淺草公園に隣し道行く人も何となく浮調子に一時的利害と面白味とに走りて眞面目なる精神修養に心ないと思はれるほどではあるがされど人はいつまでも精神の光明と慰安を求めずには居られぬ本會が發會以來僅かに四回の講演を開いたのみであるが漸次新らに參觀者の數を増して毎會盛況を來たして居る四月十日第五例會を淺草慶印寺に開いた記者は本誌掲載の講演を爲し山根會長は人格の調整と題して智力も意思も感情も皆相共に調ふて進まねばならぬ所以を平易懇切に説明せられたるが聽衆は何れも傾聴して感に入つたのを見つけた同會は場所だけに一層の努力をして欲しい之は記者の心に浮んだ望みの一念

神奈川 教報

神奈川縣大村村本長寺住職今井賢教師は風儀改善の目的にて青年を中心として矯風會を組織し三月十二日その發會式を舉行す東京より並川眞應師を懇請して午後五時より講演を開催せるが勢願令師は本會設立の理由に就て述べ横濱漸次郎氏は愛郷心は愛國の要素なる所以を述べ淺尾清造氏は英雄豪傑に就て武力と靈力とに分ちて論じ並川師は意氣と節義に就て教養の方面より又は歴史の方面より反覆丁寧細説せられ青年をして奮起の志氣を鼓舞し午後十一時開會せり當日會する聽者は皆青年にして七時間の長廣舌に幸と倦怠するなき各演者の談話に對し清聴して敢て耳語するが如き態度のなかりしは本會發展のために喜ぶべき現象といふべし

房總 教報

縣下蘇我木更津間の一部なる蘇我坊々時間鐵路九哩強は三月廿八日開通式を行へり本線は軍事上重要な鐵道なりとの事なるが開通式當日は停車場所在民は祝賀の盛況を演ぶ地方より出入出遊も多く此機會に於て布教の法益を布くべく君津千葉市原三郡の顯本宗寺院住職は縣下布教師會と連絡し開通紀念布教を行ひたり當日は中村會長飛山常事竹内里見龜崎の諸師及夏目波邊小澤澤澤小池澤澤大塚國芳小高石橋秋葉監獄教訓師も特に参加せられ本線二分五井橋々時間には竹内里見兩師主管に八橋濱野間飛山龜崎兩師主管に各布教師及有志参加し各教線を設けて産業の奨励國民道

維の策與日蓮主義の特長を説き多大の教益を...

東海 道 教信

至誠熱烈なる山本師の赴任以來滿一...

豊橋

日蓮主義殆んど豊橋宗教界の革新を...

教信

一流の士は競ふて天晴會にも入會するの盛況...

教理の缺點を論評し日蓮主義の特長を發揮せ...

大阪 教報

大本法華宗第六回西語講習會は四月...

宗教

夫より關田講師本多大僧正の講演あり午後正...

宗教大観

本多大僧正 野口日主師 野老乾爲師...

本門教

國民道徳の基礎 關田養叔師 國友日煇師...

本傳説

毎日消息研究 國友日煇師 友田宏道...

教報

「道に其父を見る本多大僧正」(六日)「宗教界...

京都 教信

市外千早村に「四日」下佐藤村在郷軍人會に...

神戸 教信

四月一日午後七時より市内湊川新聞...

廣島 教報

大橋布教師は廣島縣下連教のため廣...

教師午後七時より説教を修し、幻燈を閉催せり。二十七日中馬村中村助一氏宅に於て説教を爲して信仰を勧め三月一日井原村高原寺に開演。二時より「開會趣旨」提正善信仰の力」演口會。心に明鏡を用ひよ。大橋布教師午後七時より「權實相對」の説教及教育に關する幻燈。参拜者百餘名。二日午後開會「歸迷開悟」演口會。旭「法華經」と三篇の對校」大橋布教師にして参詣頗る多し。三日午後二時「信仰の要義」演口會。旭次に「日蓮主義國體」大橋布教師夜間は説教及幻燈にて閉會を告ぐ。四日市川村字正木世良孫三郎氏宅にて説教全村は全村集て顯本法華宗信徒にして参拜者非常に多數なり。殊に信徒の依頼にて四座の説教を爲し演題は「法華宗と眞宗との對校」夜間は説教幻燈を行ひり。巡教僅かに週開なりしも何れも聽衆多くして熱心に傾聴し居りたり。日蓮主義を傳ふるに幾多の樹果ありしなるべしと思ふ。

長州 教報

長州日蓮田教會所は今より廿年前の創立にして始めは日蓮宗次は本門法華宗に屬したりしが、勸請雜亂して信仰の歸趣に迷ふもの多く識者の排斥する事となり三月七八九十の四日間朝倉布教師は歸を留めて純正なる日蓮主義を鼓吹したるがため在來の信仰を改むるものも多かりしと云ふ。

九州 教信

久留米市日蓮研究会は昨年五月出張俊義氏が有志と共に組織せし會にして毎月二回相會して研鑽しつつあるが三月十二三の兩日朝倉布教師は統一的大宗教に就て本佛論人身觀行法

観を説いて日蓮上人の卓見を論明せられ同市今町報徳會にて精神修養上の講話を試み人生實生活と日蓮主義の關係を懇説せられて一般の思想進路を示すものありたりと云ふ。



宮殿●須彌段 前机●幢幡 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



正價 三法堂佛具發賣目錄

注意
佛具と稱すれども此の種類類有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は、郵券四錢御送附後下候は、迅速進呈仕候。此の目錄を御覽あれ。寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも品な左の通り

- 佛具一切 過去帳の類 ●大般若經 一切經 ●理題分 ●位牌 ●太鼓
- 佛具金物 一切 釣鐘 ●牛鐘 ●水引 ●打敷 ●和幡 ●唐幡 ●人天蓋 ●樂器類 ●懸
- 中啓 ●洞 ●鏡 ●鏡 ●木像 ●厨子 ●茶機 ●檀子 ●香具類 ●正價附にして
- 銀鬼幡 ●幡 ●木像 ●厨子 ●茶機 ●檀子 ●香具類 ●正價附にして
- 三寶寶座 ●平輪 ●製文庫 ●檀子 ●香具類 ●正價附にして
- 板 ●佛坐 ●自由自在

佛具卸部

東京都三條 木舖 三法堂藤田總次
通小橋西入 振替貯 大阪 四二五九
特電話 二千七百八拾三番 金富號 東京 二〇七一
小賣部 同市三條 通大橋西入

大僧正本多日生觀下著

橘香集

大僧正本多日生觀下講述

法華經講演集

本書は佛陀觀宇宙觀人身觀等の絕對開顯統一の意義を闡明にし本佛の大慈活躍し日蓮主義の光輝燦然たり日蓮主義者の一讀を薦む

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ月前金六拾五錢郵税六錢 代金へ振替貯金口座東京一三一九番へ拂込マレ
※此場合ニハ 送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十五年四月廿五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日輝

發行所 統一團

東京市淺草區北清島町十四番地

序說 如來壽量品 洋裝美本 正價五錢 郵税四錢

特製皮金文字入美本 金六拾錢 並製ケロックス金文字入 金貳拾錢 (郵税二錢)

統一



第 二 百 七 號

日本と西洋との異點

内務省書記官 中川 望

自強將命と統一

海軍大佐 佐藤鐵太郎

精神修養

子爵 五島盛光

統一と開顯

文學博士 姉崎正治

信仰實驗談

大審院檢事 矢野 茂

各地活動史

